

パキッと実験 スパッと成果

関高生「縄文人」に挑戦



動物などの骨や角で作られた縄文時代の道具「骨角器」の製作過程を調べようと、関高校の生徒らが手作りの石器を使い、骨を加工する実験をした。ナイフのように鋭い「くさび形石器」を使えば、大型の動物の骨も十分割ることができると分かった。結果は五月の日本考古学協会の学会で発表する。
(本間貴子)

同校は文部科学省のスーパードグローバルハイスクール事業の一環で、二〇一四年から北海道・礼文島の縄文時代後期の遺跡発掘調査に参加している。昨年は自作のくさび形石器で鶏肉をさばく実験に取り組んだ。

この遺跡からは骨でできた釣り針や銚が出土し、今回は縄文人がどうやって骨を加工したかを調べた。指導教諭の林直樹さん(五十)によると、実際に骨の割れ方を実験で調べた先行研究は非常に少ないという。

実験には生徒有志十人が参加
石器を使って豚の骨の加工実験をする生徒たち
関市桜ヶ丘の関高で

石器使い骨加工 学会発表へ

加。岐阜県産の下呂石、長野県産の黒曜石、礼文島産の頁岩の三種の石でくさび形石器を製作し、二十センチほどの豚の大腿骨を道具や条件を変えながら割っていった。

焼いた骨はもろくて簡単に折れたが、生の骨は石でたたいても表面がくぼむ程度で、割るのに時間がかかった。

「縦に割れた剝片を作るにはどうすればいい」「石器で一点を集中して打ったらどうなる」などと試行錯誤。遺跡から出土した骨片と同じ形に割れると歓声が上がった。

生徒らは石器の消耗具合を確認しながら、割れる様子や傷の付き具合を動画に撮って記録していった。黒曜石と頁岩は肉をさばくのに適しているが、骨を割る強度では下呂石が優れていることも分かった。一年の尾下拓未さん(一七)は「条件を変えながら実験するのが楽しい。加工方法や道具は違っても、釣り針や彫刻など、昔も今も同じものを作っているのが面白い」と話していた。